

セイヨウミザクラの果実

(1房2果)

石沢 進

サクランボの果実は、中に1ヶの種子を含むものが、普通の形である(写真1)が、1房に2果がつきそれぞれに種子を含む場合がある(写真2・3)。それは畸形ともみなされるが、潜在的にサクラ属に存在する特色とも言える。

セイヨウミザクラの果実は、花後の早い時期に液質の外果皮・中果皮と木質の内果皮に分化するが、その頃には、子房の中に2個の胚珠が認められるが、一般には、片方の胚珠が圧迫を受け、その後残った方の胚珠だけが発達し、果実内の全域を占めることが知られている(トロール 2004)。

今回写真で撮ったセイヨウミザクラでは、2個の胚珠、つまり退化する胚珠も発達して2果が連結する状態で成熟したと見られる。写真2・3は、その発達の様子を示していると思われる。両胚珠が均等に発達してものであろう。一方が小さく、途中で発達が遅れて、他方が大きくなったものもある(写真4)。果実中の種子も均等のもの、一方が小さく、他方が大きいものもある(写真5)。

以上のようにセイヨウミザクラでは、畸形というよりは、潜在的な特色が発現した現象と解釈できよう。

桜桃生産者の話しでは、栽培管理の状況により1房2果の形成が変動するという。その年の温度や降水量など気候条件により変化するとも話している。

なお、日本の桜類について1房2果の状況を見ていないが、野生種について更なる調査が必要である。

トロール(中村信一・戸部 博訳)(2004) 植物形態学
ハンドブック 朝倉書店

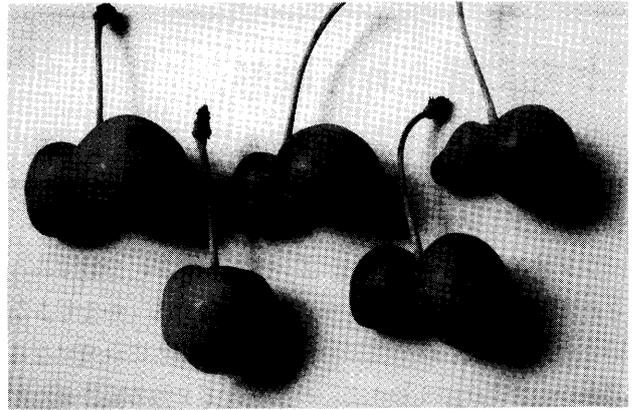


写真2 1房に2果

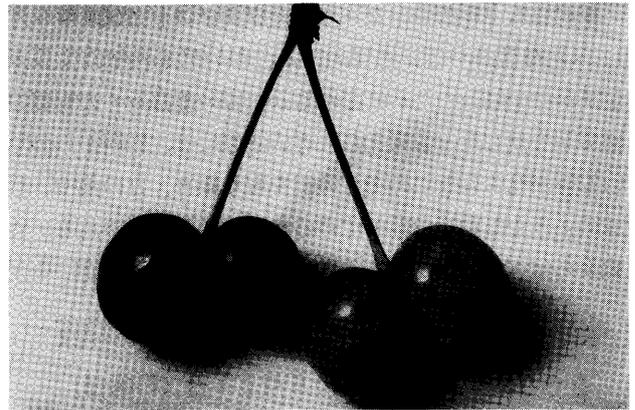


写真3 1房に2果

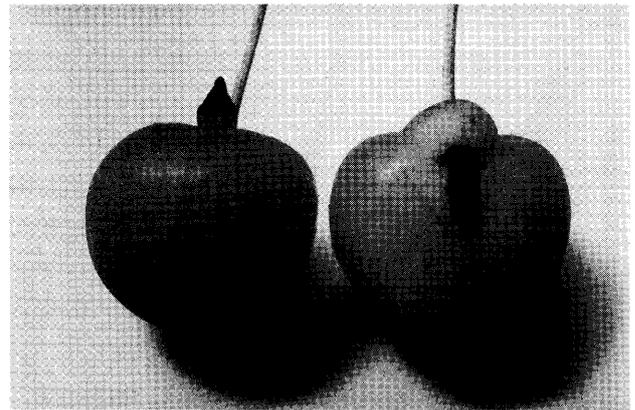


写真4 1房に2果(ただし一方が小型)

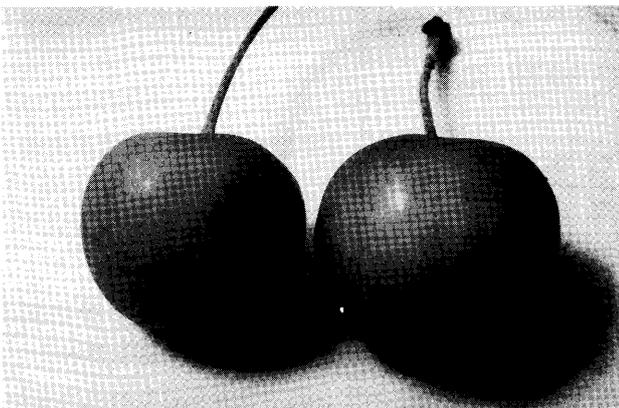


写真1 ほぼ正常な果実

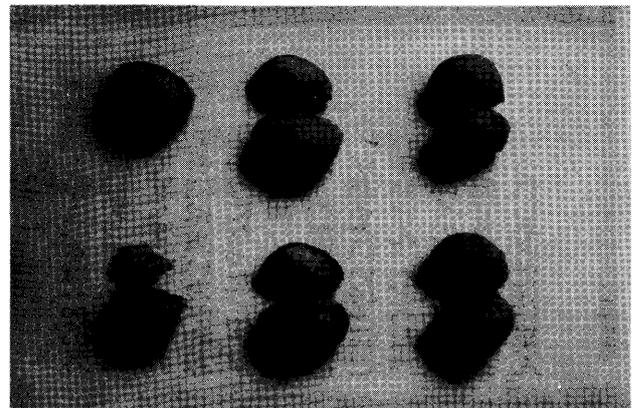


写真5 1房2果の中の種子